

疥癬虫はいつ発見されたのか？

服部 瑛

医療法人はっとり皮膚科医院

はじめに

まず、くどいようだが経緯を述べさせていただく。10年ほど前、上州(群馬県)の医師・上原元伯の『暴瀉病ニ付』という渾身なる古文書をみつけ幕末のコレラのことを初めて目にし、さらに赤堀家文書(群馬県伊勢崎市)の『安政記聞』の中で系統的に安政5・6(1858・1859)年のコレラの実態を知ったのは偶然ながら幸運なことであった¹⁾。その後地元の倉賀野神社や赤城神社、玉村宿の『三右衛門日記』²⁾などからもコレラの古文書をみつけ、さらに関東地区の古文書を渉

猟しながら、2021年秋に『古文書からみた幕末のコレラ—コロナ禍に遭遇して—』³⁾(みやま文庫・群馬県)を上梓することができた(図1)。コレラに関しては、「流行する(うつる)が、感染する(細菌が侵入する)ことはまったく知らなかった」ということが実に意外だった。つまり現在知られている感染の概念は当時の想像をはるかに超える事実だったわけで、本邦では図1のような悪鬼(実際はみえない)のような「気」にその原因を求めていたというしかない。

その後、文久2(1862)年にもコレラがさらに猛威を振るったことを調べる作業から、幕末のコレラのこと



図1 『古文書からみた幕末のコレラ』(群馬県・みやま文庫)の表紙
床には畳を敷き病人が柵を手で支えて吐いている。その吐いたものを犬が舐めている。屋根からは悪鬼(疫鬼)が覗いているが、この姿はみえない(『日本常民生活絵引』より)。なお、この表紙の絵図は『春日権現験記絵』に収められているものである。

はぜひとも残しておかねばならないと考え、「群馬県に残された風説留」(URL <https://hattori321komonjo.livedoor.blog>)と題してブログを立ち上げることを思い立った(2023年3月)。

周知のようにコレラは細菌感染症である。コレラ菌の発見は明治17(1884)年だったことを知って⁴⁾、それでは目にはみえにくい疥癬虫の発見はいつだったのだろうかと疑問が湧いた。確かそのことは本誌に以前投稿した『吉田松陰と疥癬』⁵⁾を調べたときから、調べる術もなくその後ずっと闇のまま放置しておいた疑いだった。

今回、ブログ上に「吉田松陰と疥癬」を載せようと『吉田松陰全集』^{6, 7)}を紐解いてもう一度疥癬を試行錯誤していた際、書棚の片隅でずっと日の目をみなかった『列氏皮膚病学』⁸⁾[明治29(1896)年]を何気なく手にとってみた。驚くなかれ、そこにはなんと疥癬虫の発見に関する記事があるではないか！

I. 『列氏皮膚病学』の疥癬

ここに下平用彩⁹⁾先生の『列氏皮膚病学』[明治29(1896)年]の疥癬の項を転載させていただく。それは、外科医の下平先生がドイツ医書『皮膚及生殖器病論』より「皮膚病編」を訳述したものである。わかりやすくなるようにカタカナをひらがなに、旧漢字は新漢字へ変換し、句読点を打ち、一部の漢字をひらがな読みにした。長文なので冒頭の疥癬虫発見の歴史のみを掲載する。

第1章 疥癬 Scabies

疥癬(scabies)は壁虱類に属する寄生虫、即ち人体疥癬虫(*Acarus scabiei hominis*)の皮膚に棲息するによりて起こるものなり。疥癬患者の皮膚内にこの小動物の寄生することは往古より人の知る所なりしも、最も確実にこれを記述せしはある寺院の尼長サンクテー ヒルデガルチス氏の理科書(第12世紀の中葉)にして、爾来Suren(これ当時疥癬虫に付したりし名称なり)の語 諸書に散見せり。然れども近世紀に於ける主要の研究と見なすべきはハバノモ氏及びツェストニー氏(1687年)の研究及び殊にウィッヒマン氏の

「疥癬病理」と題する論文(1789年)を以て其最とす。この論文は当時普通に行われし腐敗液、即ち刺衝性(刺激性)敗血を以て疥癬の原因となせし説に反対し疥癬虫を以て其唯一の原因と見なし、これを精密に論述し剩へこれに添うるに図書を以てしたりしかども、其説未だ普く學術世界に是認せられずして遂に当世紀に至り巴里に於いて屢々懸賞して再び疥癬虫の発見を奨励するに至れり。然れども其初め未だ良結果を得ざりしが、漸く1834年に至りコルジカの一学生ベヌッチー氏初めて巴里の医家に示すに疥癬虫の実物を以てせるより以来、疥癬虫に関する知識はまた消滅せざりし。然れども疥癬虫の本性に関する研究は吾人これをヘブラ氏に負う所多し。尚ここに付記すべきは同氏の研究は同時に又液体病理の排斥に与って効ありたることは是なり。(以下略)

ここで強調したいのは、1834年フランス(コルシカ)のベヌッチーという一学生が疥癬虫の実物をパリの医師たちに示し(おそらくベヌッチーは疥癬の病態には精通していなかったのであろう)、その後の疥癬に関しては有名な皮膚科学者ヘブラの研究に負うところが多かったということである。おそらくそれまでは疥癬はなんとなくうつることを経験的に知っていたのであろうが、ベヌッチーという学生の疥癬虫の発見は、感染の原因が具体的に示されたことで、ノーベル賞的な価値があると私は秘かに思っている。なぜならば、それまでの体液説、瘴気説、日本では悪霊(悪鬼)などと考えられていた感染症の概念を覆すべく、外からの異生物が原因であることをまさに実態としてみつけたわけで、その延長線上に細菌やウイルスの発見があったと考えるからなのである。しかし、このベヌッチーの疥癬虫発見はインターネット上でも明治34(1901)年の『皮膚病診断及治療法』⁹⁾『現代皮膚科学大系』¹¹⁾『最新皮膚科学大系』¹²⁾でもみつけることができなかった。残念なことである。

疥癬虫がみつけられた1834年は、本邦では天保5年のことである。すでに吉田松陰が、日記に「小瘡」と表現している疥癬に罹っていたことは以前本誌で述べた。この際、松陰も兄も医師たちもこの皮膚病を不思議がるだけで感染のことにはまったく触れていない。

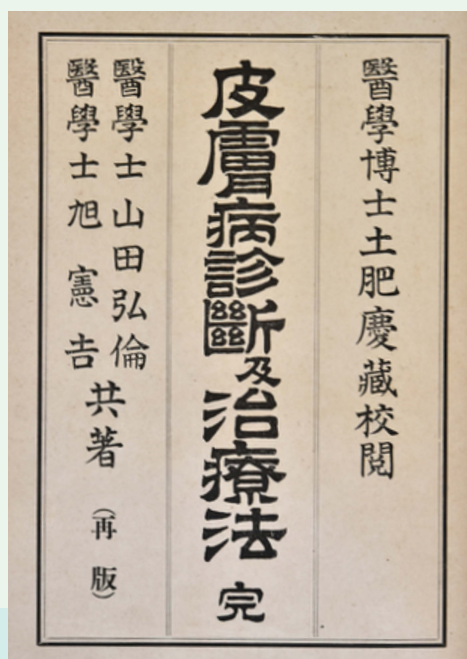


図2 山田弘倫、旭憲吉『皮膚病診断及治療学』[明治34(1901)年]

右上に著者名でなく土肥慶藏先生のお名前がなくて最初はびっくりした。

ということは、幕末当時まだ疥癬の感染(疥癬虫)はやはりまったく想定外のことだったのではなかろうか。

II. 皮膚科用語の造語について

この機会に、併せて皮膚科病名の造語について考えてみたい。明治に入ってようやく皮膚科学は体系化されたが、その功労者は土肥慶藏先生という帝国大学教授[現東京大学、明治31(1898)年就任]とされ、その功績によって「皮膚科開祖」と称せられている。明治29年に外科医・下平先生が皮膚科教科書を書いているのだが、そのころはまだ皮膚科学が完全に独立しておらず、医学領域の中で混沌としていた時期だったと推定している。ちなみに、国内の皮膚科学会で最大の「日本皮膚科学会」(日皮会)は、『列氏皮膚病学』が刊行されて5年後、明治34(1901)年から始まる。総会は今年(2024年)で123回目になるが、土肥先生は驚くべきことに、第1回から第27回まで連続して27年間も学会会頭の任にあたられた(第28回目は旭憲吉先生)。異常なことだと思い、西山茂夫先生(元北里大学教授)にお手紙で尋ねたところ、「私が入局したころ、皮膚科の総会の参加者は100人以下で、大学の解剖学教室

で行われていました(ドイツでも同じ)。会頭を27年も続けていたのは異常ではないようです」とのご返事でその疑問はにわかに氷解した。土肥先生の皮膚科独立にかかわるご苦勞のほどが伝わってくる思いである。このことから、土肥先生はおそらく皮膚科を臨床科目として真に独立させようと奮闘されたのであろう。手元にある日皮会発足年[明治34(1901)年]に再版された『皮膚病診断及治療学』⁹⁾(山田弘倫、旭憲吉)という教科書にわざわざ「医学博士 土肥慶藏校閲」とある理由が腑に落ちた思いである(図2)。教科書冒頭の「此の書ハ専ラ余等ガ我帝国医科大学皮膚科教室ニ於テ恩師土肥教授ノ指導ノ下ニ(途中略)是ヲ特ニ同教授の校閲ヲ経テ上梓セリ」がそのことを物語っていて、心から恩師を顕彰された行為だったのであろう。こうした経緯の中から、以前述べたように、皮膚科的な用語も整理・新造された。それまで各地で「皮癬」^{ひぜん}「小瘡」などと呼ばれていた疥癬も然りで、ほかの皮膚病でも、白癬や乾癬あるいは苔癬、頑癬、魚鱗癬などと造語¹³⁾されたにちがいない。生前大変お世話になった福代良一先生(元金沢大学教授)からいただいた別冊には「土肥は、その著書・皮膚科学(大正11年版)において汗疱状白癬の語を造り足蹠・趾間・手掌の白癬全体を表現する言葉とした」¹⁴⁾とあったことから造語のことがほのかに伝わってくる。なお、ここで多用されている「癬」^{せん}という言葉は「たむし。ひぜん。皮膚病の一種」とあったので、この「皮膚病の一種」を病名に汎用したのではないかと考えている。いずれにしても、皮膚科病名の用語には明治時代の余韻が色濃く残されていて、先人のご苦勞の跡が垣間みえてくるような気がしてならない。

おわりに

古い話題を提示して、年寄りの冷や水だとお笑いくださるな。今回紹介した『列氏皮膚科学』に収められた疥癬の説明は、詳細を極め21ページにも及んでいる。疥癬虫のこと、さらに卵子、糞便のことなどが絵図(図3)とともに、詳細に語られていることは特筆すべき点である。しかし、全文を掲載する紙幅はない。興味ある方は、私のブログ(「群馬 風説留」)で検索可

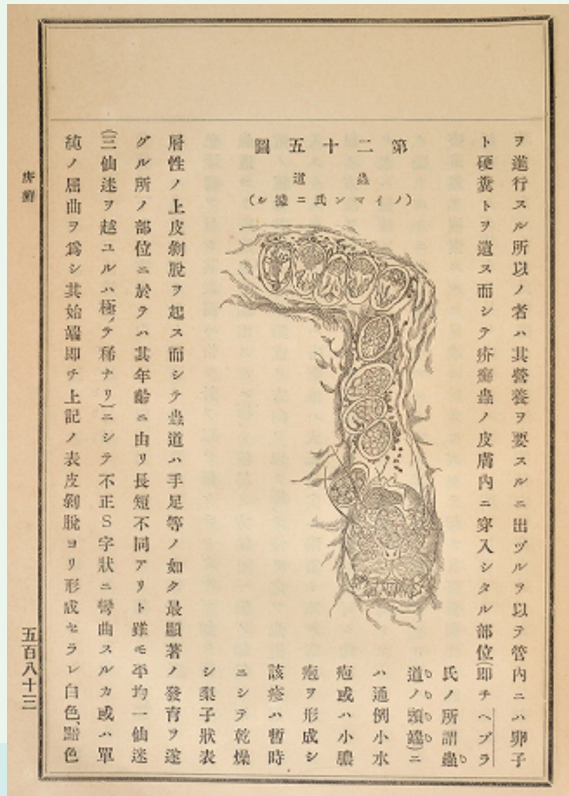


図3 『列氏皮膚病学』[明治29(1896)年]に示された疥癬トンネル

疥癬トンネル内の疥癬虫(下方)・卵子(上方)・糞便(中ほど)が詳細に描かれている。

能. カテゴリー群馬県医師会報の中の疥癬)に原文(図3)と合わせて転載したので参照されたい。この疥癬文中の最後に「もしある理由ありて全家族の身体検査を拒否せらるゝが如きこと有らば医師は宜しく其治

療を謝絶すべし」とあったが、当時疥癬の感染説はなお多くの人から認知されていない状況を想像させてくれる。

それにしても、ブログなどという文明の利器は私には到底無縁なものだと思っていたのだが、杵淵辰巳氏という写真家が快く手を差しのべてくださった。そのためかブログには心地よい写真が散りばめられている。氏には心から感謝したい。

〈文献および注記〉

- 1) 服部 瑛, 服部友保: 皮膚病診療 39: 330, 2017
- 2) 服部 瑛: 皮膚病診療 42: 250, 2020
- 3) 服部 瑛: 古文書から見た幕末のコレラ・コロナ禍に遭遇してー, みやま文庫, 群馬県, 2021
- 4) ウイリアム・H・マクニール, 佐々木昭夫訳: 疫病の世界史, 中央公論新社, 東京, 2014
- 5) 服部 瑛, 服部友保: 皮膚病診療 40: 216, 2018
- 6) 山口県教育委員会: 吉田松陰全集 7, 大和書房, 東京, 1972
- 7) 山口県教育委員会: 吉田松陰全集 9, 大和書房, 東京, 1974
- 8) 下平用彩: 列氏皮膚病学, 吐鳳堂書, 東京, 1896
- 9) しもだいらようさい, 明治大正期の外科医, 帝国大学医科卒, 元石川県立病院院長
- 10) 山田弘倫, 旭憲吉: 皮膚病診断及治療法, 朝陽堂書店, 東京, 1901
- 11) 山村雄一, ほか編: 現代皮膚科学大系 8, 中山書店, 東京, 1984
- 12) 玉置邦彦, ほか編: 最新皮膚科学大系 16, 中山書店, 東京, 2003
- 13) ちなみに, 医学用語の造語で有名なものが, 肥前大村藩士・長与専斎が命名した「衛生」という言葉である。
- 14) 福代良一: 臨床科学 32: 1023, 1996

追記

本稿を書き上げて、念のため西山茂夫先生にお手紙の一文を掲載する許諾をお伺いしたところ、数日後、古い皮膚科学教科書のコピーとお手紙をいただいた。さりげないご厚意に感謝感激したことはいうまでもない。文面はその古い皮膚科学教科書に関することで、一部掲載させていただく。「土肥慶蔵先生の皮膚科学の14版を持っていますので、疥癬虫の絵をお送りします。前にも云いましたが、現在どの皮膚科の本よりも素晴らしいものです。索引が〈あいうえお〉ではなく〈いろはに〉には参りますし、序文がドイツ語はま

だしも、あと書が、漢文なのには参ります。いやらしいというより当時(1927)は普通なのかもしれませんね。第1版は、大正3年出版です」とわれわれが想像できない遠い昔の皮膚科を彷彿とさせてくださった。

なお、西山先生の「疥癬の最近のヒットは、吉住順子さんの水尾ですね。開業医の仕事としては最高の模範です」というご意見も付け加えておきたい。西山先生は90歳を越えられても、なお現役の皮膚科医でられることにただただ脱帽している。